

死者表象の民俗学的研究
～神格化と偉人化という視点から～

提出者 及川 祥平

〔論文の内容の要旨〕

民俗学における「人神信仰」の研究は、柳田國男の「人を神に祀る風習」以来多くの蓄積があり、今日なお注目されているテーマの一つである。本論文は改めて「死者表象」という視点から「人神信仰」を問い直し、「人神的事象」の歴史と現状の解明につとめたものである。近代における死者の「神格化」と「偉人化」の包括的な把握を試みた第一部と、武田信玄、大岡越前守といった個別事例の実証的研究を行った第二部、そしてイベントブームと言われる今日、これら歴史上の人物が置かれている状況の把握につとめた第三部から成る。

序章 神と偉人～人と神の間をさぐるために～

第一部 近代日本の神格化と偉人化をめぐる世相

一章 顕彰神論～楠木正成の表象史から～

二章 偉人化される死者たち～近代の贈位をめぐる～

第二部 神格化と偉人化の実態

一章 郷土の偉人の変容～山梨県における武田信玄祭祀の近世と近代～

二章 偉人の発見～大岡忠相墓所の史蹟化と贈位祭の検討から～

三章 伝説にみる偉人の神秘化と権威～信玄・家康の伝説を中心に～

第三部 現代社会における神と偉人

一章 神・偉人の観光資源化と祭礼・イベント～大岡越前祭と信玄公まつり～

二章 教育資源としての神・偉人～赤穂市における義士教育を中心に～

三章 子孫であるということ～その立場性をめぐって～

終章 本研究のまとめと今後の課題～民俗学的歴史認識に向けて～

以下、章ごとに内容を要約する。

序章 神と偉人～人と神の間をさぐるために～

本章では「人神信仰」に関する先行研究を整理した上で「神格化」を死者表象の一樣態とし、加えて「偉人化」を「神格化」と同等に位置づけることにより、従来軽視されてきた「人神信仰」の多様な側面の解明が可能になると主張する。また、今日の「人神信仰」の研究にみる記憶論的アプローチ、および社会学、社会史系の記憶論を批判的に検討した上で、「記憶化」と「想起」という観点から（動態的記憶論の立場から）死者表象を実証的に把握することが、本論文の課題にほかならないとする。

第一部一章 顕彰神論～楠木正成の表象史から～

顕彰神の代表格とされる湊川神社・楠木正成について、その神格に至る表象史に分析を加え、顕彰の手段としての湊川神社の創建が、近代の思想・制度のもとで行われたことは疑いのないものの、正成のイメージや彼を讃美する発想は前近代の長い経過の中で重層的に形成されてきたものであり、死者表象史という観点からみた場合、近代性が過剰に強調されていると指摘する。

第一部二章 偉人化される死者たち～近代の贈位をめぐる～

歴史上の人物を序列化し、多くの人物の偉人化にかかわったとされる贈位について検討を加え、一般に贈位は国家による歴史の再編であり、民衆の心情とは乖離した「上からの評価」であるかのように見えるが、ローカルサイドでも候補者選定や申請運動、祝賀会を行うなど、ナショナルな論理とローカルな論理の複合乃至は緊張関係のもとで行われたとする。

第二部一章 郷土の偉人の変容～山梨県における武田信玄祭祀の近世と近代～

本章は信玄の祭祀史および顕彰過程の分析を通して、人々の信玄への志向性（思い入れ）の変化について論じたものである。近世においては甲州金、甲州柀といったローカル法や武田浪人といった身分制度にかかわる権威として、^{クシナカ}国中の人々に限って想起される側面が強かったが、近代以降ナショナルな歴史知識を前提とした表象過程にさらされ、それに伴って、山梨県民という一体性を支えるシンボルとして位置づけられるようになったと指摘する。

第二部二章 偉人の発見～大岡忠相墓所の史蹟化と贈位祭の検討から～

大岡忠相の墓所は神奈川県茅ヶ崎市に存在していたものの、忠相と当該地域とは直接かわりを持つものではなかった。しかし贈位を契機に地域との関係が発見され、祭礼が誕生し、近世以来フィクショナルな世界で構築され、流布していた名奉行・忠相のイメージは近代も継承され、法曹界の人々による墓所参拝という興味深い現象を生むに至ったと指摘する。

第二部三章 伝説にみる偉人の神秘化と権威～信玄・家康の伝説を中心に～

家康のそれと比較しつつ、信玄にまつわる伝説のうち「樹木伝説」を中心に分析を加え、信玄との縁故を歴史化しようとする寺院の戦略が読み取れると指摘する。また、信玄等世俗的偉人にまつわる伝説の中には、宗教的偉人が引き起こしたものと同様の奇瑞譚が認められ、世俗的偉人と宗教的偉人に対する庶民の眼差しの分かち難さについては、権威跪拝の変遷史からアプローチする必要があると主張する。

第三部一章 神・偉人の観光資源化と祭礼・イベント～大岡越前祭と信玄公まつり～

本章は忠相・信玄といった歴史上の人物の観光資源化について分析を加えたものであり、歴史上の人物を題材とするイベントや銅像・記念碑等の世俗的装置が、人々の「形式感覚」（「らしさ」を感じ取るセンス）によって、宗教的時空、宗教的対象物とみなす傾向を擬似神格化現象として捉え、「神格化」と「偉人化」の複合的発現が、今日でも起こりうるとする。

第三部二章 教育資源としての神／偉人～赤穂市における義士教育を中心に～

本章は、元禄赤穂事件の四十七士の祭祀・顕彰活動を踏まえた上で、今日の教育資源化の状況を検証したものであり、一般に歴史の観光資源化に関する議論では、対外的アイデンティティ（外部の他者との異質性）の提示のための資源として歴史を強調するのに対し、赤穂における教育資源化の動きからは、対内的アイデンティティの育成（望ましい歴史認識を有するコミュニティ成員の育成）への志向も読み取れると指摘する。

第三部三章 子孫であるということ～その立場性をめぐって～

武田家臣末裔の組織である武田旧温会の活動に分析を加え、同会は先祖同士のつながりを確認し合い、末裔としての自己を語り、末裔として振る舞うことを許容された場にほかならないが、会員の思惑にも微妙なズレがあり、これらの人々が公共領域で発信される様々な歴史表象に対して違和感を表明する姿からは、歴史への態度の複数性が確認されると指摘する。

終章 本研究のまとめと今後の課題～民俗学的歴史認識論に向けて～

「人神信仰」は、従来「崇り神信仰」との関係で捉えられるケースが多く、民俗宗教的側面に限定して論じられてきた。しかしながら死者の「偉人化」は歴史的現象であり、「神格化」と同等の歴史性を想定すべきで、本論では、「神格化」と「偉人化」の形態およびそれらの近接性、複合性について論じた。ちなみに、近現代は「神格化」と「偉人化」の複合型である「顕彰神」を量産したが、それは「崇り神的人神」を改変して生み出された新しい文化現象というよりは、あらかじめ存在した「顕彰神」あるいは「顕彰神的なるもの」の、国家による政策的活用であり、その一元化志向は同時に歴史認識をめぐる競合状況や複数性を顕在化せしめるものであったとする。

また、現代の「人神的事象」については、近代のそれを基本的フレームとして踏襲しつつ、戦前的なものへの反省に立っており、一方では観光資源としての活用が際立つと指摘し、最後に死者の「偉人化」をめぐる文化史的研究の必要性を強調して結びとしている。

〔論文審査の結果の要旨〕

「人神信仰」は、柳田以来民俗宗教的視点から論じられてきたが、近年小松和彦によって、顕彰・記念といった「人神信仰」の枠を越えた研究の可能性が示された。本論文は、「神格化」に加え「偉人化」なる分析概念を用いることにより、「人神的事象」の研究へと対象領域を拡大し、近代の「顕彰神」の位置づけを明確にするとともに、変貌著しい現代民俗への対応を可能とした点で評価できる。

なお、「人神信仰」の歴史的流れからいえば、近代初頭は一つの大きな転機であり、明治政府は贈位によって顕彰神を量産した。しかしながら民俗学においては、政治的力学と距離を置いて論ずる傾向（民俗の純粋化指向）が際立つ。そうした中で『増補版 贈位諸賢伝』を手がかりとして贈位の歴史的経緯を明らかにし、ナショナルレベルの動きとローカルレベルの動きを対照させつつ、「顕彰神」誕生の実態を明らかにした功績は大きい。これが評価される第二の点である。

第三の点は、従来の「記憶化」にウェイトを置いた静態的記憶論を批判的に検討し、その可変性・文脈依存性を前提に、「想起」なる分析概念を用いることにより、記憶の動態的把握の可能性を示したことである。「人神的事象」の研究のみならず、民俗学における聞き取り調査にも有効な分析概念と考えられる。ただし、方法論的検討は必ずしも充分ではなく、今後の課題として残されている。

もう一つの問題は、通史的把握に関してである。古代・中世においては「崇り神（御霊）信仰」が重要な位置を占めていたことは確かであり、この点を認識していれば、研究史の理解も多少異なるものとなっていたと思われる。また、中世末から近世初頭が「人神信仰」の一つの転機であり、この時期の情勢を知ることにより、前近代の顕彰神の様相を知ることが出来ただろう。近・現代に焦点を据えるにせよ、本テーマの研究においては、通史的把握が不可欠であり、それによってより豊かな死者表象像を描ける可能性がある。この点も今後の課題である。

ともあれ、「神格化」に加えて「偉人化」なる分析概念を用い、従来軽視されてきた「顕彰神信仰」の実態を明らかにするとともに、狭義の「人神信仰」から「人神的事象」研究へと道を切り開いた論文として、今後の民俗学研究に裨益するところは大きい。